

国語

(解答番号 ① ～ ③⑩)

一 次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも吉田徹『感情の政治学』の一節である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。解答番号は ① ～ ⑮。

【文章Ⅰ】

信頼をキーワードに人びとの行動規範をみると、人びとの集合行為がどのようなにされるのか、ということも見てくる。

例えば、他人や将来に対する信頼が欠落していた場合、経済活動はうまくいかなくなる、と経済学者の松原隆一郎はいう。そのうえで、人びとの将来的な見通しの根拠となっていた生産要素の固定要素(土地、資本、労働)を流動化させてしまったために、日本は一九九〇年代に長期不況に突入することになった、とシテキ^Aする。九〇年代後半までの不景気は、個人が消費意欲を一定程度保つことができたためにそれほど酷^{ひど}くならなかったものの、構造改革路線によって企業経営や雇用環境が大きく変化させられたために、人びとは将来に不安を抱えるようになった。そして将来の収入がどうなるのかという見通しが成り立たなくなったために、消費は控えられ、その結果デフレが定着することになったわけだ。

これは、各人が自己防衛のために合理的に行動することで社会全体の厚生が下ってしまうような、「合成の誤謬^ア」の典型的なケースだ。信頼なきところで人びとは合理性のみを頼って行動することになる。そうすると、共同体全体で損が膨らんでいくことになる。

この「合成の誤謬」のわかりやすい例として、ゲーム理論でいうところの「囚人のジレンマ」をみてみよう。これで信頼が果たす役割についてさらに理解できるはずだろう。

「囚人のジレンマ」の設定にはいくつかのパターンがあるが、基本形は、警官が囚人AとBに、モクヒ^Bするより自白した方がともに刑が軽くなる(例えば五年でなく二年)と持ちかけ、もし一人が自白したら彼はすぐ釈放され、もう一人はチョウエキ^C一〇年に処せられることになる、と自白を促すものだ。二人の囚人は互いに相談はできない。こうした状況では、二人ともモクヒするのが互いの得になる(警官は自供以外に犯罪を知る手立てがない)。ただし、相手が自分を裏切って自白すると考えた場合、ともに相手を裏切り、それぞれ五年の刑を受けることになる。

裏を返すと、こうした「囚人のジレンマ」のシチュエーションでは、人びとは互いを信頼して協力するのではなく、合理的な損得勘定から協力しようとしていることになる。実際に、政治学者のロバート・アクセルロッドは、囚人のジレンマの実験を通じて、人びとの間に

信頼がなくとも、協調行動が成り立つことを実証してみせた。例えば、彼は第一次世界大戦時、西部戦線での英仏連合軍とドイツ軍の塹壕戦ざんこうせんがなぜかくも長きにわたって膠着状態こうちやくに陥ったのかを調べ、それは敵対する者同士で互いに協調行動が生まれたからだとしてテキスする。第一次世界大戦は、数ヵ月以内に終わると予測されていたにもかかわらず、結局四年間にわたってつづいた戦争だが、その理由のひとつに塹壕イを挟んでの膠着状態があった。独仏の国境地帯では、お互いの顔がみえるほどの距離で、両軍が数キロにわたる塹壕を掘って対峙たいじしていた。機関銃や大砲で相手を攻撃することはできる。しかし塹壕に籠こもられていては、ともに決定的な打撃を与えることはできない。しかも、もし相手を攻撃すればその分だけ、報復される可能性がある。いかなれば相手を攻撃するのは、自陣営に弾を撃ち込むのとまったく同じ効果を持つことになるのである。こうした確信が相互で共有されていたために、両国の兵士ともに、相手のいないところに暇つぶしに射撃したり、相互に攻撃しない時間を設けるといった、互いに生存を保障するための知恵を編み出したのだ、とアクセルロッドはシテキした。実際に「奇妙な戦争」と呼ばれた第一次世界大戦で敵対する兵士同士で協調行動がみられたことは、日本では戦後に公開されたルノワール監督の『大いなる幻影』（一九三七年）や、実話をもとにしたカリオン監督の映画『戦場のアリア』（二〇〇五年）などでも描かれている。

勘のよい読者ならわかるように、そしてアクセルロッドがまた検証しているように、こうしたある種の協調行動は、核兵器による相互破壊が確実になった冷戦期の米ソ対立で再現された。彼の実験によれば、プレイヤーが囚人のジレンマ状況にあり、くりかえしゲームがプレイできる場合、最も効率的な戦略は「しつぺ返し」戦略、すなわち相手の出方を待ち、その相手が取った行動（協調なら協調、裏切りなら裏切り）をそのまま自分も採用することだった。そうすれば、少なくとも相手より不利になることはないからである。

もっとも、アクセルロッドが力説するほどに「しつぺ返し」戦略は、いつも有効なものではない。その戦略が有効であるためには、そもそもくりかえし「しつぺ返し」できなければならぬ。しかし塹壕戦とちがって、核戦争は起きてしまえばくりかえしはきかない。

それでもこのアクセルロッドの主張がシヨウゲキ的Dだったのは、それが、個々人の間で信頼がなく、それぞれが利己的に行動しても、協調関係が成り立ち得るということを証明したからだった。協調関係と言って言い過ぎならば、少なくとも、相手に対して絶対に優位になろうとは考えず、相手の選択とつねに同じ選択をすれば、安定した関係がつづくことになる、ということを言外に主張したからだった。

このように社会は信頼がなくても機能しないわけではないし、信頼がなければ社会ができあがらないわけでもない。しかし、結論からいえば、やはり信頼ウなき社会は不安定である。

例えば、強制によって人びとの行動を律することは十分に可能だろう。ただし、人びとが特

定の行動をとらなかつた時、これを罰する制度やルールを用意しておかなければならないから、その分のコストがのしかかってくる。そう考えて、今度は強制を契約に置き換えることもできるだろう。もしAということが履行されなかつた場合には、Bという報酬は与えられないとする合意に基づく約束があれば、それは人びとの間の協力関係を促す要因のひとつになる。ただし、ここでは、契約の履行は何らかの直接的な利得に結びつくという条件が用意されていなければならない。また、協力や信頼に代えて競争を導入して、社会の効率を向上させようとすることもできないわけではない。技術革新を起こしたり、サービスの質を向上させたり、より良い資源配分を実現させるために競争は有効な手段のひとつだ。しかし、競争で脱落した人間や企業の救済手段もなければならぬから、ここでも補完措置は必要になってくる。

こうした強制や契約、競争に基づく社会関係よりは、信頼に基づく行為でもって、集合行為にまつわるコストが低いままに、社会関係を構築できる。「しつぺ返し戦略」や強制、契約、競争は社会で果たす機能として信頼と類似していても、質的にはまったく異なるものである。社会関係資本にも、最終的には自分の利益が重視されているという側面はある。しかしその利益が現実のものとなるかどうかは飽くまでも他人にかかっている。言い換えれば、他人への信頼こそが自分の利益を保障するという意味で、他の行動規範と異なるのである。

南イタリアを専門にする社会学者ガンベッタは、信頼なき社会ではどんな問題が実際に生じるのかを紹介している。それがシチリアの州都パレルモで、タクシーの無線配車システムが導入されたものの、これがうまく機能しないという事例だ。このシステムはうまく働かなかつた。なぜかという、タクシー会社に配車を頼む客からの電話があつた後、会社が客の場所に最も近いタクシーを無線で呼びかけると、どの運転手も自分の稼ぎを増やそうと、自分が一番近くにいと会社に返信してしまい、客のいる場所に複数の車が殺到してしまつたからだ。そうすると、最適な配車がままならず、せっかくの配車システムも機能しないことになる。これは、運転手が会社を信頼せず、誰かが抜け駆けするのではないかという相互不信ゆえに制度が機能せず、結果として社会全体の効用が下がってしまう例のひとつである。シチリアに行くときわかるが、道路は我先にと目的地向かう車で溢れ、信号も守られず、運転マナーはないに等しい。それは、公的なものがまったく信頼されていないからだ。イタリアで税捕捉率が低く、地下経済が国民経済の三割近くもあるというのも、同じメカニズムである。

先の例をつづければ、信頼の不足は監視でもって代替できるかもしれない。タクシーの配車の例をとれば、日本で一般的になつたように、車にGPSを設置すれば解決できるかもしれない。しかしその場合、余計な初期投資がかかるということになるし、GPSシステムを扱えるだけの技能を皆に教えないといけないことになる。ガンベッタは、マフィア組織の専門家でもあるが、彼はこうした社会で相互不信ゆえに生じる非効率さを代替するものがマフ

イアだったのだ、と論じる。彼らは社会の構成員の相互不信を利用しつつ、安心を提供することで、合成の誤謬による負の効果を回避して、社会的な機能を担ったのだ。

いずれにしても、^エ信頼を何かで代替するのは簡単なことではない（その逆の方が易しい）。現代社会では、行政だけでは手当てできない問題がますます増えている。増大する課題に対処するためには、行政サービスの量を増やさなければならぬが、そのためには予算手当が必要となる。もし財政上、それが許されないのであれば民間事業者がこうしたサービスを手がけるように市場を整備し、参入のインセンティブを作らないとならない。その過程ではいろいろとマサツもあるだろう。例えば、待機児童の問題はどここの市町村でも見られるが「幼保一元化」^Eには、親ばかりでなく、業界団体・職員組合の同意も得なければならぬ。彼らの権益を殺ぐ^セには、何らかのサイド・ペイメント（補償措置）も必要になってくるだろう。

社会関係資本を元手に「幼保一元化」があっても誰も損はしないのだ、という信頼があれば、あるいは子供たちの面倒を人びとのつながりのなかでみることができれば、当事者だけでなく社会にとってもプラスになるかもしれない。

また現代社会では、科学技術が広く手軽に利用できるようになった「民主化」の側面と、他方でますます複雑かつ専門化する「高度化」の傾向が強まっている。高度な科学技術の恩恵を気軽に利用できるようになった一方、遺伝子組み換えといった食の安全、携帯・ネット通信の大衆化によるいじめや犯罪問題、原子力の問題に至るまで、リスクはますます顕在化している。しかも、リスクを回避するにしても、必ずしも信頼に値しない専門家に依存しなければならぬという状況にある。いずれにしても、すべての情報を自分たちで集め、自分たちで判断することはできない。すなわち、他者をまったく信頼しないというのは、非効率であるばかりか、思わぬリスクを抱えることになるかもしれないのだ。

【文章Ⅱ】

人びとの間に信頼があつて、そこから人びとが信頼を寄せる制度が作られるのではなく、人びとの信頼はまず公平無私な制度があつて生まれるのだという立場をとらない限り、社会のなかで信頼を増やしていくのは難しい。これは、実証上の問題ではなく、優れて倫理的かつ論理的な課題である。社会の全員にとって公平な普遍主義的な政策があり、それが人びとの間の信頼を高める作用を持つという因果関係を仮定しなければ、問題は解決されない。税制の例でいえば、すべての納税者を受益者とするのが政策への信頼を高めるためにまず必要であり、増税はこうしてはじめて可能になる。反対に、増税が何らかの特定の目的のためであることが強調されると、その社会での信頼がないと、増税は難しくなる。少なくとも、信頼が生成されるためには、増税の目的と対象は普遍的なものでなければならぬ。すなわち、特定の誰かのた

めの政策ではないという「無私性」がなければ、個人間の信頼は生まれようがないのである。

こうした論理は、社会心理学でも証明されている。実験で観察されたのは、人は一般的に、他人が自分の問題を解決する能力をどれだけ持っているか、それだけの理由でその他人は信頼されないということだった。人は他人の持つ客観的な能力ではなく、その人の価値観、その人が信頼に値する人間であるかどうかの方が、信頼の条件とするのである。

こう考えると、信頼のない社会で最初に必要とされるのは、「善意の政治権力」である。それは個別的な利害から離れており、善なる意図を持っていなければならない。それは人びとを公平かつ公正に扱うこと、つまりどのような人びとも善なる存在であるという前提を置く権力でなければならない。この善意の政治権力が生み出されてこそ、信頼のない社会にはじめて断絶が生じ、無から有を作り出すかのようにして、社会の構成員を包摂できるような制度が作られていくことになるのである。

（本文中に一部省略・改変したところがある）

問1 二重傍線部A～Eに相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それ

ぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ① ～ ⑤。

A シテキ ①

- ① プロにヒットテキする技術だ。
- ② 病院でテンテキを受ける。
- ③ 嫌な予感がテキチュウした。
- ④ 密輸入をテキハツする。
- ⑤ カイテキな生活を満喫する。

B モクヒ ②

- ① 内閣不信任案をヒケツする。
- ② ゲーム攻略のヒサクを授ける。
- ③ 信頼を失い大臣をヒメンされた。
- ④ 落ち葉を微生物がタイヒカする。
- ⑤ ヒライシンを屋根に設置する。

C チヨウエキ ③

- ① チヨウハツに乗らず冷静に対処する。
- ② 税金をチヨウシユウする。
- ③ チヨウバして人を傷つける。
- ④ 経済のチヨウリユウを見極める。
- ⑤ 違反によってチヨウカイされる。

D ショウゲキ ④

- ① 壁にショウゾウガを飾る。
- ② ショウツキメイニチに慕参りをする。
- ③ 忙しきで友人とボツコウショウになる。
- ④ 対立してソショウを起こす。
- ⑤ 試合を前にしてイキシヨウテンとなる。

E マサツ ⑤

- ① 肘にサツカシヨウができる。
- ② ドウサツが鋭い人物。
- ③ 会社の経営陣をサツシンする。
- ④ メイサツが多い界限。かゝり
- ⑤ 飼い犬にカンサツを付ける。

問2 傍線部ア「合成の誤謬」とあるが、この具体例として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑥。

① 教育費や老後の生活に不安を覚えた家庭が子供を作らないという選択をするが、そうした家庭が増えると少子化が進み、老後の年金を支えてくれる労働人口が減るため、年金制度が破綻する。

② ある企業が収益を上げる目的で銀行からの借入金を増やして商品を増産したら、高い利益を得たが、多くの企業でそれを行っても、社会の景気が悪くて消費が減退していたら企業の倒産が増える。

③ 不景気のために消費を控えて貯金を殖やそうとすると、その家庭の貯蓄額は増えるが、多くの家庭で同じことをすれば、消費が冷え込み、収入が減少する家庭が増え、全体の貯蓄額は減少する。

④ トイレットペーパーがなくなるとい^う噂を聞いて、各家庭が競ってトイレットペーパーの買いだめに走ると、店頭からトイレットペーパーが消えてしまうので、トイレットペーパーを買えなくて困る人々が続出する。

⑤ ある漁場で、一人の漁師が誰よりも先に船を出して多くの魚を捕るとその人の収入は増えるが、他の漁師もこぞって魚を多く捕りはじめると、乱獲によってその区域では魚がいなくなるため、漁師たち全体の生活が成り立たなくなる。

問3 傍線部イ「塹壕を挟んでの膠着状態」とあるが、これについて、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「膠着状態」はなぜ生じたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は ⑦。

① 国境地帯ではお互いの顔がみえる距離で塹壕を掘って対峙していたため、両軍ともにかつに攻撃することができないまま、にらみ合っていたから。

② 両軍ともに相手の出方を待ち、その相手がつた行動と同じ行動を常にとっていたため、先に攻撃した方が負けることが確実になってしまったから。

③ 相手を攻撃しても、塹壕に遮られて決定的な打撃を与えられないばかりか反撃されるときえ、互いに無駄な攻撃をやめることで合意したから。

④ 両軍は極度の緊張状態にあったため、いつなるとき攻撃されるかわからないので、どちらも相手より先に攻撃しようと機会をうかがっていたから。

⑤ 相手を攻撃すればしつぺ返しをされて自軍に被害が出るという認識が共有されており、自分たちの生命の安全のために攻撃し合わなかったから。

(2) 筆者は傍線部イの事例を通して、どのようなことを伝えようとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は ⑧。

① 敵対する者同士が、戦争は数カ月以内に終わると予測し、あんもくり暗黙裡に互いに生存する知恵を生み出したこと。

② 個々人の間で信頼関係がなく、各自が利己的な行動をとったとしても、協調行動が成立する場合があること。

③ 「しつぺ返し」戦略はいつも有効というわけではなく、核戦争がいったん起きてしまえば終わりであること。

④ 相手に対して優位に立とうと考えず、相手と同じ選択をすることを心がけても、対立した関係が続くこと。

⑤ 相手が裏切るなら裏切りを、協調するなら協調を自分も採用すれば、相手より次第に優位になっていくこと。

問4 傍線部ウ「信頼なき社会」とあるが、信頼のある社会を築くためにはどのようなことが必要といえるか。その説明として最も適当なものを、【文章Ⅱ】を踏まえて、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 9。

① 強制によって人びとの行動を律するのではなく、合意に基づく約束によって、人びとの間の協力関係を促すことが一般的になること。

② 他人に対する信頼こそが自分の利益を保障することを人びとが実感でき、信頼に基づく行為によって社会関係を構築できること。

③ 個別的な利益から離れて、人びとを公平に扱い、利益が特定の誰かに集中することも、誰かが損をすることもない政策を立てられること。

④ 人びとが特定の行動をとらなかったときに罰する制度やルールがあり、政治権力が人びとにルールを守らせるうえで寄与すること。

⑤ 初期投資がかかったとしても、行政サービスの量を増やしたり民間事業者がサービスを代行したりして、補完し合えること。

問5 傍線部エ「信頼を何かで代替するのは簡単なことではない」とあるが、このことを示す事例として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 10。

① 問題を解消するために何らかの施策を行うおとする場合、直接的な影響を受ける利害関係者の同意を得るための方策が必要になる。

② 知が専門的で高度になった現代では、専門家が信頼に値しない場合、自分で情報を集めて判断しなければならない。

③ 社会保障制度は国民のセーフティネットであるが、信頼を代替する強制として機能するためには、平等・公平・公正に恩恵を受けられるシステムでなければならない。

④ 増税などの政策を打ち出しても、政府に対する信頼感が低ければ、国民の支持を得ることが難しく反発が強まる。

⑤ メンバーを監視し、制度をきちんと機能させるためには、手間とコストをかけなくてはならない。

問6

次の(1)～(5)は、本文を読んだ生徒五人の感想である。本文の内容や趣旨に照らして、適当なものには⑩を、適当でないものには⑪を、それぞれ選びなさい。解答番号は

⑪

⑮

～。

(1) 生徒A——私たちは日本の景気が良かった時代のことを直接は知らないけれど、長く続く不景気の原因が、人々が将来の生活に対する不安を抱いたことによる合成の誤謬だったことは知りませんでした。

⑪

(2) 生徒B——人びとが信頼し合う社会の実現は不可能だけれども、信頼のない社会では、まず「善意の政治権力」が必要とされるというのは、信頼のある社会でも意識しておくことではないかなあと思いました。

⑫

(3) 生徒C——シチリアでタクシーの無線配車システムがうまく機能しなかったのは、どの運転手も自己利益を優先して会社や仲間を信頼しなかったからで、相互不信ゆえの失敗の例だと思います。

⑬

(4) 生徒D——日本のタクシーの配車では、誰かが抜け駆けするのではないかと思わず、正直に自分の位置を会社伝えるのでうまく機能しているというのは、信頼を大切にする社会だからですね。

⑭

(5) 生徒E——「囚人のジレンマ」は、相手に対する不信感に基づいて自分が一番有利になる選択肢を各人が選んだ場合、各人が相手を信じたときよりも悪い結果が生じるという問題提起だと思いました。

⑮

二

次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも青山文平『跳ぶ男』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。解答番号は⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺。

【文章Ⅰ】

その川は藤戸藩で最も大きい川だった。にもかかわらず、名を持たなかった。

正しく言えば、藤戸藩では誰もその名を口にしようとしなかった。

藤戸藩の領地のあらかたは台地の上に広がっていて、そして、川は台地を形づくる高い段丘の裾を、縁取るように流れていたからだ。

対岸の向こうには伸びやかな平野が陽をたっぷり受けて広がっていたが、しかし、そこは他国の領地だった。藤戸藩の領民が豊かな流れの恩恵に与かるには段丘はあまりに切り立っており、川はひたすら、他領の田のみを潤していたのである。

おまけに、流れを引き込んだ河岸には、水運の船問屋も軒を並べていて、遠目にも殷賑を極めているのが見てとれた。水の匂いも届かぬ台地の上で暮らす人々は知らずに、川の名の響きに耳をふさぐようになったのである。

川はどのように名を持たなかったが、段丘の崖に危なげに刻まれた坂路を下りたあたりの河原には名があった。

つまり、そこだけは台地の人々の役に立っていた。

どう役に立っていたかは、河原の名から察することができる。

一帯は、野宮と言った。

ただし、そこに社があるわけではない。

台地の人々は野墓を、そのまま声に出すのを憚って、野宮と呼び換えて遣っていたのである。

藤戸藩より二十俵二人扶持を授かる道具役、屋島五郎の長男、剛が、初めて河原を目にしたのも、やはり、野墓としてだった。母の菊の入る棺に寄り添いながら、父と、親類縁者と共に急な崖の路を下った。

と言っても、そのとき剛はまだ六歳で、野墓のなんたるかを知らない。葬列者の一人が、「風が雨風だな。降ってこぬうちに埋葬が済まぬと坂の上り下りが難儀だ」と言い、別の一人が「その代わり、仏はつつがなく流れるだろう」と受けても、なにがどこに流れるのだろうと想っていた。

子供ながらに呑み込みにくいものを感じたのは、四十九日の法要のあとに同じ顔ぶれで墓参をしたときだ。

また、あの急坂を下るものとばかり想っていたのに、一行が向かったのは台地の上の、箱庭のような墓地だった。肩を接するようにして墓石が並んでいたが、その墓石があまりに小さい。たとえ自分だって、その下に入るのは難儀しそうだ。いや、赤子とて無理かもしれない。

なぜ、それほどまでに小さいのか、なんで、母が埋葬された河原ではなく、そこに墓参りをするのか……わからないことだらけだったが、いちばん知りたいことだけははっきりとわかった。

ここに、母は居ない。

母は、野宮に、居る。

なぜかはわからぬが、皆が母の居る野宮に背を向け、誰も眠っておらぬ箱庭の墓地で手を合わせている。

「いや、野墓には居らぬだろう」

百か日の、二度目の墓参りのあと、小さな腹に溜めたものを思い切って切り出した剛に、そう返したのは、三つ齡上の岩船保だった。野宮ではなく、はつきりと野墓と声に出して、居ないと言った。

「あのあと、すぐに大雨になって野墓も流れに洗われた」

二人は、印地という子供どうしの合戦ごっこでよくつかう、お宮の裏の濡れ縁に並んで腰をかけている。印地といえは川を挟んでの石打ちだが、台地に川らしい川はないので、棒切れを手を取っての合戦になる。石打ちは消えて、名前だけが残っている。

「今頃はもう海かもしれない」

保は端整な横顔を見せて「海」を口にするが、保も剛も海など見たことがない。台地の上の子供にとって、「海」とは「すっこく遠い処」を表す言葉だった。

「海って……」

とたんに、剛はうろたえた。大事な亡骸が流れに暴かれてよいわけがない。なにかまちがいがあるって、「海」にまで攫われてしまったのだろう。すぐに、埋葬の日に葬列者が言った「流れるだろう」という音が蘇って、あのととき自分が止めておけばと悔いた。自分が迂闊だったから、いま母は墓を失って、「海」に居る。

「どうしたらいいだろう」

半べそをかきながら、剛は問うた。そう言えば、埋葬はいかにも浅かった。埋めると言うよりも、仮り置きをして、大人が片手で持てるくらいの玉石で覆う程度だった。埋葬を助ける野守の人たちがつくってくれた玉石の墓に、葬列者が一つずつ手にした玉石を加えた。あれでは大水になったら墓はあつけなく崩れて、母は流されてしまう。わかっていたのに、自分は声を上げられなかった。大丈夫じゃないのに、大丈夫と思い込もうとした。でも、やっぱり、大丈夫

夫じゃなかったんだ。

「どうしたらって？」

保が訊き返した。

「どうしたら、母上を海から取り戻せるだろう」

剛は重ねて問うた。保ならば、答が返ってくるはずだった。保の父、岩船光昭^{みつあき}は剛の父と同じ道具役を務めていた。つまり、保もまた軽輩^{*}の長子だったが、すべてが剛と重なっているわけではなかった。保は英才の誉れ高い少年で、六歳で『節用集』の和辞書をものにし、七歳で『小学』はむろん『四書』『五経』を読み通した。おまけに^{からだ}躰も強く、俊敏で、印地では常に大将だった。保は降りるはずのない土地に降りた鶴であり、剛にとって、保の発する言葉は生強^{C なまじい}の大人の言葉よりも遥かに重かった。

「取り戻すことはないんだ」

その保が、言った。剛の涙交じりの訴えを去なすように。

「えっ」

「取り戻さなくてもいいんだよ」

「なんで？」

保の言葉とも思えなかった。海から取り戻すのはそれはたいへんだろうが、印地の大将ならば、きつと無理を無理でなくしてくれるにちがいないと想っていた。

「ここの野墓は仏様を閉じ込める場処じゃあない。海へお送りする場処なんだ」

「お送りする……」

「海への湊^{みなと}なんだよ。この国では、仏様はみんな海へ出ることになっている」

「じゃあ、お墓はどこにもないの？」

「ああ、ない」

^E言下に、保は言った。

「今日、参ったお墓は？」

「あれは詣り墓^{まいぼか}だ。野墓^{うず}が埋め墓^{ぼか}で、あのちっぽけな墓が詣り墓。墓参りをするためだけの墓さ。だから、あんなに小さくて済む」

^ウ二度、母を失ったような気持ちになりかけている剛に、印地の大将はつづけた。

「ここはそういう国なんだ、剛。まっとうな墓を持てない国。詣り墓と、埋め墓と、二つも墓があるのに、^Cほんとうの墓はひとつもない」

「誰がそう決めたの？」

そんなの、ひどい。死んでもお墓に入れないなんて。ほんとうのお墓参りもできないなんて。決めた人に、変えてもらわなければならない。

「決めたのは人じゃあないんだよ」

諭すように、保は言う。

「この土地さ」

「この土地、って……」

「この国は台地の上にあるだろ」

思わず深く首を垂れる。

「おまけに崖が高く切り立っている。川が使えなくて、泉が湧く処でしか田んぼができないから、米がちっとしか穫れない。俺も剛も米なんて喰ったことがない」

こんどは曖昧にうなずく。剛は六歳だが、まだ乳を飲んでゐる。この御代、子供の乳離れは五、六歳だ。剛が格別、遅いわけではない。でも、なぜか、保には、いまでも乳母の乳房に頼っていることを知られたくない。

「仕方ないから、米が穫れない分まで畑を隙間なくぎっしりと広げようとする。でも、ここは台地だ。いくら広げたくたって、台地の縁まで拓けばお終いさ。そして、この国の畑はもう百年も前に縁まで行き着いている。もう、どうやったって新しい土地は手に入らない。いまある土地は、なけなしの土地なんだ」

ふっと息をついてから、保はつづけた。

「そんななけなしの土地を、墓になんて使えるはずがないだろ。土地はみんな田畑のためにある。この国に、仏様が眠っていられる土地なんぞないんだよ。だから、海にお送りする」

もしかしたら……と剛は思った。皆が野墓ではなく野宮と呼ぶのは、言葉を柔らかくしているのではなく、河原が野墓でさえないからかもしれない。野墓は埋め墓だ。誰も彼もいっしょくたとはいえ、埋めはする。打ち棄てるようなものではあるが、埋葬ではあるのだ。野宮では、それさえ敵わない。

「だからさ」

④ 顎を上げて、保は言う。

「俺はこの国をちゃんとした墓参りができる国にするんだ」

お宮は南を向いているので、宮裏は北に面して陰になる。でも、保がそう言ったときは、薄い鎮守の森の樹間から、微かとはいえ、陽が一条差したような気がした。

「野墓の向かい岸に、田んぼがずうっと広がっているだろ」

いつの間にか、顔が、印地の大将の顔になっている。

「いまは他領だが、あの土地をこの国のものにする。あれだけあれば、いくらでも墓ができる。海へ送らずに済む。俺は父上母上を、その墓にお納めする。いや、この国のすべての仏様をお納めする」

剛はおずおずと保の横顔を見やる。

六歳の子供が九歳の少年の気負いを感じ取って、宮裏の陰を貫いていた、か細い陽がすっと消える。

保の言を信じたいが、こんどに限っては、印地の大将なら無理ではないかもしれない、という気になれない。いくらなんでも、話が大きすぎる。それは御藩主や、御家老の御務めなのであるまいか。

保とて、自分と同じ道具役の倅だ。

エ
印地の大将にはなれても、本物の大将にはなれない。

剛は保が、ちょっぴり心配になった。

(注) * 軽輩——身分の低い者。ここでは下級武士。

【文章Ⅱ】

保は、藩の門閥である半藤家の三男に脇差わきざしを向けるという事件を起こしたことの責任をとり、自害した。以下はその後の場面である。

岩船保が腹を切ったのは、それから八日後である。

啓学館に通っていない屋島剛には、いったいなにがあつたのかわからない。

それでも、どこをどう伝ってきたのか、吟味に当たつた鵜飼又四郎うかいまたしろうが得心していない様子は遅れて耳に入ってきて、剛は、自分ならば、と思つた。

印地の大将と、手下だ。偉い御目付おめつけには理解できなくても、きっと自分なら、保の言葉をわかるはずだ。

けれど、十四歳になつた剛は日頃、保以外の人間とほとんど交わつたことがない。保を失えば、世界が閉じる。伝つてはない。

土竜もぐらが陽の下を歩き回るように、あちこち駆けずり回って、保の最後の言葉を探した。自分をわかつてくれた保のために、保をわからなければならなかった。

なにからなにまで、いつも印地の大将だった保だ。まちがった命令を下したことがない。その保が最後で誤つた。けれど、保のことだ。世の中からは誤って見えても、その言葉はきつと印地の大将の言葉のはずだ。

ない伝を手繰り寄せて、なんとか求めたものに辿り着く。

さあ、と耳をそばだてた。

乾いた砂地が水を迎えるように、言葉が入ってくるのを待ち構える。
が、砂の色は変わらない。

いくら待っても水は見えない。

いったん切り上げて、ほんとうに、その言葉だったのかと幾度となく相手にたしかめる。そのつど、同じ返事を得る。

再び気を集め、言葉を入れようとするが、入ってこない。

御目付と変わらぬ。

得心できぬ。

けっして、想いの外、ではない。

それらしくはある。

通りはわるくない、と言ってもよい。

でも、わからない。

保らしくない。

「父の御勤めを愚弄された」

「能は侮られてよいものではない」

保らしくない。

道具役に甘んじようとしなかった、保らしくない。

問1 二重傍線部A～Eの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤

のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳。

A 殷賑を極めている⑬

① 家屋が多い

② 混雑している

③ うるおっている

④ にぎわっている

⑤ 幸せそうである

B つつがなく⑰

① 損傷なく

② おだやかに

③ 順調に

④ 心安らかに

⑤ 想定通り

C 生強の⑱

① 生ぬるい

② 頑固な

③ 形式的な

④ 至らない

⑤ 中途半端な

D 去なす⑲

① 軽くあしらう

② 追及をかわす

③ はぐらかす

④ ばかにする

⑤ 受け流す

E 言下に⑳

① 突然

② 即座に

③ 冷淡に

④ きっぱりと

⑤ 大胆に

問2 傍線部ア「子供ながらに呑み込みにくいものを感じた」とあるが、その理由の説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

① 雨が降れば仏は流れるだろうという葬列者の言葉を聞いて、何か悪いことが起こりそうないやな予感がしたから。

② 母を埋葬したのは野宮だったのに、四十九日の墓参に訪れたのがまったく別の場所だったことに不審を抱いたから。

③ 皆で参った母の墓が、赤子でも納めることができなさそうな、ひどく小さなものだったことに驚いたから。

④ 母は野宮にいるはずなのに、皆がその野宮に背を向けて箱庭の墓地で手を合わせていることが不思議だったから。

⑤ 墓参に訪れたのが、母を埋葬した野宮ではなく母が居ると思えない台地の上の墓地なのが納得いかなかったから。

問3 傍線部イ「とたんに、剛はうろたえた。」とあるが、このときの剛の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

① 母の遺体が大雨により暴かれて流れてしまったと知って、どうにかして母を見つけ出してやらなければ、母がかわいそうだと慌てている。

② 大切な母の遺体が海に流されたと知って、埋葬の日に、野宮への埋葬を中止できなかった不甲斐なさを感じて、自責の念にさいなまれている。

③ 見たこともないどこか遠い所に母の遺体が流されたと知って、もはや自分ではどうしようもないと絶望感に打ちひしがれている。

④ 母の墓は大雨で崩れて遺体が流されてしまったと知って、埋葬の日に危惧していた通り、大丈夫ではなかったのだと落胆している。

⑤ 母のいる野宮に改めて墓参したいと思っていたのに、母はすでに野宮にいないと知って、どこに参ればいいのかと途方に暮れている。

問4 傍線部ウ「二度、母を失ったような気持ちになりかけている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 23。

- ① 母が死んだ痛手から立ち直れていないうえに、母の遺体までも手の届かないところに消え、剛は心の拠り所を完全に失ったということ。
- ② 母の遺体を取り戻すことができず茫然としているところへ、取り戻さなくてもいいと言われ、保に対する信頼も失いそうだということ。
- ③ 母が死んだだけでも悲しいのに、墓にも入れてもらえず海へと流された母が世間的にも抹殺されてしまったようで二重に悲しいということ。
- ④ 人は死んだら墓に入り、供養されて成仏するのだと聞かされていたので、海に流された母が成仏できないのではないかと心配だということ。
- ⑤ 野宮に埋葬して母が目の前からいなくなっただけでなく、その亡骸が野宮から海に出ていってしまったという理解してショックを受けているということ。

問5 傍線部エ「印地の大将にはなれても、本物の大将にはなれない。」とあるが、このときの剛の様子説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 24。

- ① 印地という子供どうしの合戦ごっこでは無敵の保でも、他藩との戦いで勝利することは難しいだろうと、冷静に分析している。
- ② 他藩の領地を奪う戦いは藩主や家老が指揮することであるのに、保にそんな大それた役目が回ってくるはずがないと高を括っている。
- ③ いつもは保の考えに心を動かされるものの、今回は身分の低い自分たちには関われない領分の話だと思い、保の考えに一抹の不安を覚えている。
- ④ 印地の大将である保には全幅の信頼を置いているが、道具役の家の跡取りにすぎない保が藩の大将となる可能性はないと悲観している。
- ⑤ いつもは保の言葉を鵜呑みにしている剛だが、さすがに発想が奇想天外すぎて、誰かに聞かれたらまずいのではないかと心配している。

問6

【文章Ⅱ】について、先生と生徒たちが考察を行った。空欄 V ～ Z に当てはまる内容として最も適当なものを、次の各群の ①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ㉔ ～ ㉘。

先生…この文章について皆さんで考えてみましょう。

生徒A…最後から三行目に「能は侮られてよいものではない」とありますが、なぜここで「能」が出てくるのでしょうか。

先生…保の父の役職である道具役が、藤戸藩お抱えの能役者だからです。能は、中世に武士がたしなむべき諸芸の一つとなり、江戸時代には式楽として定着しました。公式行事で能が開催されるので、各藩でも能役者に俸禄が与えられ、武士と同じ身分を得ていたのです。

生徒B…その言葉は、保が事件を起こした動機として語った言葉のようです。保は V ために、脇差を向けたのですね。

生徒C…では、相手の方が悪いのですね。半藤家は藩の門閥とはいえ、保は脇差を向けただけで、相手を傷つけたわけでもないのに、なぜ保は切腹しなければならなかったのでしょうか。

生徒B…剛も疑問に思って、W を探していますね。

生徒A…でも結局見つかっていない。「X」というのは、「納得できない」という意味ですね。

先生…そうです。ただ、「それらしくはある」「通りはわるくない」とあることから、Y ということですね。「保らしくない」についてはどう思いますか？

生徒B…保を大将と慕う剛は、家格が上の人間に、縦社会の掟おきてを知る保が逆らうのはおかしいと思っただけではないでしょうか。

生徒C…私は、「道具役に甘んじようとしなかった、保らしくない。」に着目しました。他領の土地を自国のものにするという野望を抱いていた保が、能を侮られたぐらいで怒るはずはないと思っただけではないでしょうか。

生徒A…剛の考えとしてはそうかもしれませんが、保は「道具役に甘んじようとしなかった」からこそ、我慢できなかったのだと思います。Z ではないでしょうか。

先生…その見方は納得できますね。

空欄

V

㉔

① 半藤家の三男とは以前から対立していた

② 半藤家の三男が自分を無視していた

③ 半藤家の三男が父のことを馬鹿にした

④ 半藤家の三男が能役者は身分が低いと言っていた

⑤ 半藤家の三男に父の仕事を侮辱された

空欄

W

②⑥

① 半藤家の三男と保の間で何があつたのか

② 当日、その場で一部始終を目撃していた人

③ 手掛かりとなる言葉を保が残していないか

④ 保に代わって保の無念を晴らすための材料

⑤ 保の無実を証明できる証言が得られないか

空欄

X

②⑦

① 水は見えない

② 入ってこない

③ 得心できぬ

④ 想いの外

⑤ 世界が閉じる

空欄

Y

②⑧

① 切腹した理由としては妥当である

② 理解できるが、何かが引つ掛かる

③ もっともらしい言い訳ではある

④ 能役者としての名を汚すものではない

⑤ 逆上した理由として一応筋は通っている

空欄

Z

②⑨

① 藩からいただいたお役目なのに、藩の重職を担う家の息子が、道具役という仕事の重要性を理解していないことに腹が立った

② 保には能役者としてのプライドがあり、公式の行事で演じるという名誉ある芸能である能を侮れたことがどうしても許せなかった

③ 「能は侮られてよいものではない」というのは本音ではなく、能を演じることで生活を保障されていることに申し訳なさを感じていた

④ 能役者という立場をよく理解しつつも、生っ粋の武士ではないという引け目もあり、父の勤めを愚弄されたことが武士として許せなかった

⑤ 普段は父親が道具役を務めていることを恥じている様子だったが、いざ愚弄される

とかつとなってしまうほど父を尊敬していた

問7 本文の表現について説明したものとして**適当でないもの**を、次の①～⑤のうちから一

つ選びなさい。解答番号は 30。

① 波線部①a「降りるはずのない土地に降りた鶴」では、道具役という下級武士の家には似つかわしくない文武両道に優れた保を「鶴」にたとえることで、保に対する剛のあこがれの気持ちを端的に表している。

② 波線部②b「海への湊なんだよ」は、「港」ではなく遺体が海へと向かう場所として「海への湊」と表現することが、海へと「お送りする」という表現と相まって、遺体を尊び思いやる保の心情を表している。

③ 波線部③c「ほんとうの墓はひとつもない」は、故人を海に送るための埋め墓と、墓参する遺族のための詣り墓はあるが、死者が安心して眠りに就ける墓はこの国にはないことを無念に思う保の心情を表している。

④ 波線部④d「顎を上げて、保は言う。」は、いまは他国の領地である対岸の土地を奪って、この国を、すべての仏を墓に納めることができる国にするという保の破天荒な計画が冗談でなく本気であることを表している。

⑤ 波線部⑤e「薄い鎮守の森の樹間から、微かとはいえ、陽が一条差したような気がした。」は、河原が野墓ですらないことに気付いて愕然^{がくぜん}としていた剛が、保の決意を聞いて、一転、気分が高揚していくさまを表している。